

シンポジウム「これからの女流画家協会展」開催

第68回女流画家協会展は、女流展の今後の在り方を考えるアートアクションとしてシンポジウム「これからの女流画家協会展」を開催。入江一子先生の挨拶より始まり、南畠宏先生の講演と塩川、福島、上條委員によるパネルトークが行われました。会場は多数の方々が来場、熱く賑やかな雰囲気イベントとなりました。



女流画家協会展会場

講演「涙とプライド：世界の女流アーティストとの出会いから」 講師：南畠宏先生（女子美術大学教授）

女流画家協会は芸術の世界における男性中心主義を排し、瑞々しい女性たちの感性による芸術運動を展開しようと発足した団体であり、そのテーゼを今日にまで貫きつつ、それだけでなく、セクシャリティを超え、一人の画家という次元においても幾多の優れた芸術家を輩出してきた運動体ということが出来ます。

少なくともこの半世紀の世界の美術界における大きな関心のひとつが、男性中心主義に支配された美術の世界をいかに切り崩し、作品に対する純粋なクライテリアにおいて、女性芸術家の正当なプレゼンスを歴史化していくための闘争であった（あり続けている）ことを思うと、日本の女流画家協会の濫觴の志は先駆的なものとして評価できるものであり、ぜひともそのポリティカルな意味にける闘争は、時代に即しつつ、更なる進化を深めてほしいと思うところです。



南畠宏先生

私は現在、女子美術大学に奉職しておりますが、この大学も同じように、今から115年前、女性に教育の権利が与えられていなかった時代、つまり根源的な人間としての権利といってもいいわけですが、その時代に女性芸術家の育成と自立を理念として、横井玉子、佐藤志津という二人の女性が命懸けで創立した、我が国で初めての女性のための美術学校でした。現在の理事長、大村智先生は世界的な天然物有機化学者であり、北里大学の特別荣誉教授でもいらっしゃいますが、美術にも大変造詣が深く、女性芸術家を中心とした一万余の芸術作品とともに、美術館を故郷の葦崎市に寄贈されるなど、女子美だけでなく、深く女性芸術家を支援し続けてこられました。そうした歴史と使命をもつ美術大学に籍を置く現在の私の環境を、改めて私がキュレーターとして、また美術評論家として関わってきた、ジョージア・オキーフ、ジュディ・シカゴ、草間彌生、マリナー・アブラモヴィッチ、アン・ハミルトンといった、現代の世界の美術シーンにおいて、そのプレゼンスを顕著に示してきたアーティストと重ね合わせてみると、明らかに性差をして、世界を読み替えることの可能性を深く実感するものであることを、申し上げたいと思うのです。



横井玉子



シンポジウム講演「涙とプライド」



ジュディ・シカゴ



草間彌生



マリナー・アブラモヴィッチ

もちろん、彼女たちのスタンスはそれぞれです。全員がフェミニストを標榜して作品を作ってきたわけでもありません。しかし、彼女たちが自らの人生を語る言葉には、明らかに「女性原理」を湛える響きがあることを、私は感じ取ってきましたし、少なくともその女性原理の発露が長きにわたって封じられ、管理されてきたこと、その構造がいまも基本的には変わっていないことに対する、痛みのような彼女たちの無意識なる危機感をして、それぞれの作品を経験することの必要を痛感してきたのです。

それはたとえば1993年からこれまで10回訪れているアウシュヴィッツでの経験や、同じく全国に13ヶ所あるハンセン病の療養所を訪ねながら、残酷な隔離と差別の中で生きてき



アウシュヴィッツ

た人々の言葉を知るにつけ、また彼らが描いてきた絵画作品を見出すにつけ、少なくとも「もうひとつの原理」が世界に存在することの重要な意味を突き付けられる経験とも、どこかで重なる経験だったのです。

大切なことはその声を謙虚に聴くということではないでしょうか。翻って、女性というだけで会員に迎え入れ

なかった、当時の男性原理によって組織された美術界に対するアンチテーゼとして生まれた、この女流画家協会の戦い。私はそれを今日の演題である、「涙とプライド」という言葉で表現したかったわけですが、皆さんがその本質的な使命の原点に立ち返り、性差を超越した、つまりは「人間」に帰する芸術を生み出すプラットフォームとして発展していくことを願い、女流画家協会のその出発点における、同志としての「女たち」の切実な声が、皆さんの作品を通して響きわたることを願って止まないのです。

女性に甘い男をフェミニストというのでないように、私はその声が響くかどうか、自らのこととして、厳しく皆さんと向き合っていきたいと思います。そして、この思いが今日、会場で見せていただいた、皆さんの作品に対する礼であり、私の返事であるご理解いただけたら幸いです。



南高宏先生の講演・映像による解説



入江一子先生の開始挨拶

パネルトーク

南高教授の講演に続きパネルトークが行われ、3人のパネラー（塩川慧子・上條陽子・福島瑞穂各委員）から各自どのように作品に向き合っているか、作品に込めた思い等について発言があり、会場を沸かせました。

シンポジウムは充実した2時間があったという間に過ぎました。会場の方々は各自考える事があり、今後の作品に反映されていくことと思います。



南高教授(右)と司会の広瀬委員



(右より)入江、塩川、上條、福島各委員

シンポジウム 参加者の感想

シンポジウムの会場は多数の参加者が詰めかけて座席が足りず、大勢の立見が出ました。感想が多く寄せられたので、抜粋してその一部を紹介します。

■なぜ女性だけの会に色々な公募団体の人が入っているのかと思っていたが、成り立ち創成期の事が分かってよかった。■アウシュビッツの話が心に残った。芸術家は一度は訪れて人間について考えるべきだと言われた。同感である。■世界で活躍している女性画家の話聞いて深い思いを抱いて仕事をしているのだと思った。実際にその人達の作品を見たいと思った。■色々興味ある話だったので、余韻のある内に会場の作品を見ておきたくなった。絵の見方が変わると思います。■良い企画だと思った。

映像を用い話されて、視聴が同時に理解し易かった。有意義なシンポジウムでした。■オキーフの言葉「女は男より大地に近い根元的なものである。苦しいときにも笑い喜びを見出す。」という言葉は頼もしい。■ジュディー・シカゴのホロコーストを扱った作品を見たい。また現在、イスラエルがパレスチナで行っている事に芸術はどう問い、問題をどう表現するのだろうかと思う。■女性差別がこれほど根深く大きい問題で芸術活動として考えていなかった。個人的なレベルで考えていたのかもしれない。■美しいものだけではなく、人間の悪の面を考えて絵画に対する姿勢を深めたい。■取り上げた女性達の作品を知って、女性だからこそ踏み込める表現もあるのだと思った。■女性を女性として認めない時代だからこそ描きたいと女性ならではの表現が出てきて感動した。



《桜井滨江賞》

「wall 2013」100 S

遠藤 茂子 (会員・福島)

時間の流れ、心の流れの中で、消えるものと出てくる物をテーマに、ここ3~4年「wall」というタイトルで制作しています。布キャンバスにアクリル下地を施した上に、蜜ろうと紙を使います。ろう引きした和紙や洋紙を、絵の具と同じ気持ちで画面に積層させ、アクリル、水彩絵の具など水溶性の色を入れ重ね、重層する中ではじいたり定着したりしなかったりのおもしろさを楽しんでいます。蜜ろうと紙という素材を使うことによって、意図しない画面に浮かびあがるものを通して自分の世界を探してゆきたいと思っています。(橋本・中嶋)



《損保ジャパン美術財団賞》

「丘の上、E-1」130 F

當間 菜奈子 (会員・沖縄)

題名の「丘の上、E-1」は18才迄を過ごした那覇の家が、元米軍の家族住宅だった所でコンクリートの壁にペンキでE-1と表記されたままになっています。進学のため18才で上京してきた時、東京と沖縄との違いに気づきました。沖縄の空気は水分が多くぬるい。なにか濃い感じがします。背後に重みを感じます。その空気を描くため具体的なモチーフを探して、沖縄で写真を撮り歩いていたのですが、ある朝、起き抜けの布団を振り返った時『美しい』と感じたので、それをモチーフにしました。(松岡・山脇)



《上野の森美術館賞》

「華々想々」130 F

渡辺 記世 (会友・徳島)

幸せは人に凶られるものではなく自分で凶るもの。そして生きるためには誰しもが持っているであろう夢や希望を華に例えてここ4~5年、華々想々というタイトルで制作しております。山を背景に海に面した豊かな四国の地で身近に手に入れることのできる流木や自然の風化した造形には、プリミティブな命の源を赤で着色。重なる円に染めや織りの古布も合わせてカラーージュして構成し、アクリルで描いております。それらが絡み合う点・線・面を通して、日常生活の中に生きるエネルギーの根源をテーマに制作を続けたいと思います。(橋本・中嶋)

インタビュー画ガール



《水野恭子賞》

「架空園 (プロローグ)」130 F

ふじい あさ (会員・徳島)

39年間ずっと、同じテーマ「心の中の風景」を描き続けています。「架空園」は、娘とフランスに旅をした時、田舎町の小さなお菓子やで、たくさんのゼリーピーンズが、とても印象的だったので、娘との思いでを、ゼリーピーンズに託して描きました。シュールの傾向は、子供の頃から一貫していたように思います。親が壁に絵を描くことを許してくれましたので、思い切り壁に描くことができました。学生時代にダリやエルンストに出会い、共感をしました。今もエルンストは大好きです。今まで、絵を描くことですべてをのり越えて来ました。(松岡・山脇)



《大村文子記念賞》

「遠い日」120F

伊藤 麗子 (一般・新潟)

私の絵はよく「静かに佇んでいる」と言われますが、「動」が主流の現代社会において癒しを与えられるような「静」を表現できればと思い、故郷新潟の雪解けの音や緑の芽吹きを感じながら制作しています。エスキースは自身で染めた和紙にしますが、長い間「描く」ことへのこだわりから、素材の力を借りずにキャンバスと油絵の具だけで制作して参りました。今後は、柔らかさを出すには和紙の力も借りていいのかもしれないと考えております。女流展に入選し14年、今回の受賞及び会員推挙が大変嬉しく、私の今後の絵の制作の励みになりました。(橋本・中嶋)



《クサカベA賞》

「遠音」130F

堀 桂子 (会友・新潟)

4年前に始めて描いた故郷長岡の冬景色で賞をいただきました。実はその年の静かに厚く雪が積もる日に、母を亡くしていたのです。母の亡くなった日に、私は不意にはっきりと「自分が描きたかったものは、この故郷の雪なのだ」と気づきました。長岡の雪は暖かく柔らかに包みこんでくれるように、私には感じられます。暗く降り込められるというより、地吹雪の時でも、遥か上空には碧空が見えている明るさがあり、母の声が聞こえてくるようです。題名の「遠音」は「母の声が風景の中から聞こえてくるようだ」という思いをこめています。(松岡・山脇)

女流画家協会相模原展 — 委員55名による作品 —

2014年10月31(金) - 11月11日(火)
相模原市民ギャラリー

相模原市民ギャラリーで女流画家協会委員55名による作品展を開催しました。

市制施行60周年の相模原市は、将来JR相模原駅前の米軍基地の返還にともない、橋本の方面まで新しい街づくりを予定しています。その中には美術館建設も含まれています。女流展のパワーとエネルギーに満ちた作品に

共感、昨今の女性の活躍と躍進に向けて、是非とも女流展を毎年企画し応援していきたいと相模原市より申し入れがありました。これは願ってもないありがたいお話です。

この機会に作品発表の場、協会の発展と活動、勉強の場として様々な形で企画を考え、精一杯協力していきたいと思います。



相模原展ポスター



展示会場



[写真左上] 作品を観覧中の加山相模原市長
[写真右上] 展示会場入口 [写真左下] 展示会場
[写真右下] 10月31日、レセプション

次回 「女流画家協会宇都宮展」 2015年7月15日(水) - 20日(月・祝) 栃木県総合文化センター2F 第3・4ギャラリー
巡回展開催 「女流画家協会相模原展」 2015年11月19日(木) - 12月1日(火) 相模原市民ギャラリー (JR相模原駅4F)

第2弾! ワークショップ — 抽象画を描いてみましょう!! — レポート



作品

2014年7月4日(金)
東京都美術館2階 スタジオ



制作中



制作中



講評中

第68回展の関連行事として第2弾ワークショップが会期中に開催されました。当日は雨の中、予定定員を上回る約30名の受講生が参加。「抽象」の説明と制作上の留意点等のレクチャーの後、制作を開始。熱気と活気に満ちたスタジオ内となりました。

受講生の真剣な気迫が伝わり、制作時間の100分間があっという間に過ぎました。講評会で仕上がった作品を並べると、個性的でカラフルな作品が揃い、受講生から「抽象画は初めてだが、新たな発見があった」「参加してよかった」「収穫があった」等の感想がありました。

今回の受講で抽象画を理解して自分の作品制作に活かし、また鑑賞する楽しみも一層広がるとよいと思っております。(佐々木)

担当: 佐々木里加(委)、早矢仕素子(委)、岩瀬ゆき(会)、松田雅子(会)

編集後記 女流展は、いろいろな作品があって楽しいといつも言われる。暗いニュースが流れ、苦しむ世界の中で私たちは、それでも制作の喜びを味わい、楽しんでいる。この私達の仕事小さくとも平和につながるものであると信じたい。世界の平和を祈りつつ。(Y)

女流画家協会 会報 vol.3 - 2015. 6/29

発行日: 2015年6月29日

発行: 女流画家協会

編集委員: (委員) 上條陽子、山口孝子、
(会員) 松岡滋子、山脇富士子、中嶋しい、橋本とも子

女流画家協会事務所

堀岡正子方

〒239-0801 横須賀市馬堀海岸2-17-4

TEL・FAX: 046-844-0310

http://joryugakakyokai.com